

阿弥陀ヶ峰 池の平 大蛇退治弓矢の伝説

湯来町黒谷T家蔵

今を去る、約五百年前の事である。黒谷部落に九郎左エ門という、非常に弓の上手な豪傑がいた。何処から来てこの地に住み着いたか不明である。平家の落人だということである。この人の弓は射た矢は必ず当たる、一名鬼九郎と徒名された。片方の目に瞳が二つあると伝えられていた。この人の家は黒谷道のすぐ下で今のF家の前の大野という田がある。これが彼の宅地だと伝えられている。又この宅地のすぐ下が旧道でこの道に沿って細長く曲がりくねった田がある。この人の馬場であり弓矢の稽古場で毎日のように馬を乗り回し、弓矢の稽古をしていたそうだ。弓がどのくらい上手になったか試みた話がある。

黒谷部落でS家の墓地と聞けば誰でも知っている箇所がある。或る日、郷（志割）から馬に乗って帰る途中、ここまで帰ってくると、川向こう約三百Mのところを猪十二頭が山に向かって逃げていく。鬼九郎十二本の矢を取る手も見せず、ピューピューと射続けに射通した。見事十二頭全部射止めたという。馬上豊かな武の腕前であった。彼が用いた弓は七人張りだったという。当時たんぱく質の供給源は猪、兎等だった。

大蛇は山に千年、川に千年、海に千年、三千歳の修業を積んで、竜になるという。竜は竜巻に乗って天に昇り、雲に乗って天翔り大洪水を起こして海に降りるといふ。この大竜こそは、阿弥陀ヶ峰を住处として、池の草の蛇の池に住み着いていた。白砂村も菅沢村も竜の降るを恐れて、戦々恐々の有様である。ある年のこと一点にわかに掻き曇り雷鳴ものすごく大雨大荒れ、大洪水は川筋の民家を残らず押し流されたこともあった。人の命を奪い取られたこともある。雨のふる夜はろくろく眠れない有様であった。鬼九郎左エ門どうしてもこの大蛇を退治して部落民を救わねばならぬと三、七、二十一日の祈願を掛けて、いよいよ決心したのである。

その頃この地方で信じられていた噂は、池の草（蛇の池）と極楽寺山（五日市観音山）の蛇の池とは池の底が通じているといわれ、竜はどちらの池にでも出沒したと噂された。時には山中に住んでいることもある。夜になると池の水を呑みに来るそう。まあどちらにしても矢をお見舞い申そうと初日の晩、夕方早くから身支度を整えて明るいうちに池の草につき、いざござんなれと待ち受けた。しかし何時までたっても姿を見せない。大蛇は年を経て神通力を持っているそう。我のいる場所を見ているのかもしれない。段々不安になってくる。自分の一番安全な場所は無いだろうか。暗闇の中で安全な場所を捜し求めた。現在人立岩という岩がある。これは良しとその後ろに陣取ることにした。我が陣は最上だが、いつまでたても、二日たっても三日たっても池の面は静まり帰って音ひとつしないのである。鬼の九郎もへこたれそうになったが、十九日目のことである。真夜中の家の軒下三寸下がる丑三つ時、自分の家の女中が

昼でも怖い山道をハアハアと息も切れ切れでやって来た。一里半はあろうという道を唯一人「旦那様お客様が来られまして奥様のお言いつけです。すぐお帰りください」と言う。こんな真夜中に女一人で来るとはおかしいなと思ったけれど、いつもの女中に紛れも無い。帰ることにしようと家路をたどる。道々女中にお客は誰かと聞くと、知らない人ですという。時折珍客がある。野武士の頭目どもであろうと思った。途中世間話などして家の近くまで来ると「今夜は遅いので私宅に帰らせてもらいます」と女中は言い別かれて帰っていった。

鬼九郎家に帰り着いたが、家の中は客がいそうも無く寝静まっている。女房は起きて灯心に火を入れた。いつも女房と共に出迎える猫の白がいない。お客はどなたかと女房に聞くと、お客なんか有りませんよとキョトンとする。女中に言いつけた覚えはないと女房不思議顔。丁度その時表から猫の白が帰ってきた。鬼九郎何思いけん。弓を取るが早いか矢で猫を射た。鬼九郎またもと来た道を池の草へと引き返していく。女房たまげて白猫をなして射殺したかわけもわからない。鬼九郎ただただ大蛇を討ちたい一心であった。二十日目も何事も無かった。三七、二十一日目満願の夜であった。長い間の疲れも出たのか無性に眠くなった。我慢しきれなくなってきた。ついうとうとと眠ってしまった。

何時だったかわからない。悪夢でも見ていたような気がする。うなされながら目がさめた。何か異様な物音がする。暗闇に透かしてみると、人立岩の肩越しに大きな鹿が三匹、池の水を吞んでいるではないか。両脇に雌鹿一匹ずつ従え中の牡鹿は大角を振りたて物凄く見事なことである。人の目に気づいたか、角を振り立て振り立てまっしぐらに此の方に飛び掛ってきた。鬼九郎すばやく湯も矢を取り射んかなと構えたけれど、待てしばし大蛇を退治に来て鹿を討ち取って何とする。ひらりと身をおかわして、持ちたる矢の魔王見の穴から異様に光る牡鹿の目をじっと見た。魔王見の穴というのは、矢先の菱形なところに四つの穴が空けてある。修行を積んだものが覗き見ると化け物の正体が見える。即ち化けの皮が剥がされるのである。正しくこれは化け物である。鹿ではなく大蛇の化けた姿であるとわかった。飛び掛る大鹿の角の間をめがけて、満月のごとくに引き絞った矢をヒューと放つ。早いこと強いことの的外れる筈もなし。

命中したかと思った瞬間、百雷一度に落ちた大音響、大地は揺らぎ池の水は天まで沸き立ったという。苦しい大蛇の呻き声。口から吐き出す大蛇の毒気に当てられてか、さすがの鬼九郎次第に気を失い、人事不省に陥った。それ以後のことはどうなったか自ら知る由も無い。気の付いたときは白砂村のY家に寝かされていた。一ヶ月も経ったが起きられない。医者の見立ても薬も効き目が無かったという。二ヶ月経ってようやく歩かれるようになり、まる三ヶ月で家に帰ることになった。迎の者と帰れる嬉しさ、川角を通過して帰ることになった。一寸くたびれたので腰を下ろして休んだ。川角のS氏の宅の近くに今でも休み

石というのが有る。あの時に休んだ石だという。黒谷に帰ってからも三年間床に伏していた。めっきりやせ衰えてしまった由、とうとう直らなかったのである。他界する七日前のことである。九郎左エ門は妻子を枕元に呼んで、病気も余りはかばかしくない、この分では到底長生きもなるまい。今まで黙っていたが白猫を射殺した真相を話そう。猫は魔物というか、うちの白猫は年をそう取ってもいなかった。それが女中に化けていた。なして化けることが出来たかというとな何千年もこうを経た大蛇、身の危険を知って白猫を使ってわれを家に引き戻そうとしたのである。あの時白猫を射殺さなかったら、わしは猫に殺されていただろう。白は捨て猫だった。大蛇が使いものとして拾わせてT家では白猫を飼わないことにしている。竜の災難からは逃れることが出来たが九郎左エ門は死んだ。それから何百年、当時あった古文書も火事にあって焼けた。藤本家に弓矢を渡したこともあった。しかしいろいろ異変が起き又T家に弓矢は戻った。現在K家にある矢先はこんな昔話のある矢先である。蛇の池の人立岩は今も残って昔を語っている。